

史料紹介

勝浦市妙覚寺所蔵「上総国興津村広栄山妙覚寺継図写」

寺 尾 英 智

千葉県勝浦市興津の日蓮宗妙覚寺は、同地の領主である佐久間氏が日蓮に帰依して文永年間(一二六四―七五)に開かれたと伝えられる古刹である。同氏の子弟で日蓮の弟子となった日保・日家を二世・三世とし、日蓮誕生の地に開かれた小湊誕生寺と共に両寺一根と称されている。妙覚寺は、江戸時代には末寺三〇ヶ寺を擁する本山寺院であり、幕府から二五石の朱印状を受けている¹⁾。このように同寺は、房総における有力寺院として発展してきた。近年には、同寺に安置される日蓮坐像が文明十九年(一四八七)に造立されたことが明らかになり²⁾、新たな史料が呈示された。しかしながら、その他には江戸時代初期以前の史料を欠いていた。今回紹介する「上総国興津村広栄山妙覚寺継図写」は、宝暦十一年(一七六一)に書写されたものであるが、その内容には戦国時代末から江戸時代はじめのものを含み、この時代の史料を欠く妙覚寺にとって重要な意義をもつと考えられる。さらに勝浦市域を中心とする房総の地域史にとつても、貴重な情報を提供するものといえる。

本史料は、妙覚寺の塔中寺院であった聖福寺(現在は廃寺)二〇世日相が、宝暦十一年八月に書写し妙覚寺に納めたものである。表紙見返には、妙覚寺三七世であると考えられる日輪により、元文三年(一七三八)七月付の記述

- ④ 大正 1・三四〇 a
- ⑤ 方広大莊嚴經出家品 (大正 3・五七五 c)
 仏本行集經第十七捨官出家品 (大正 3・七三二 c・七三三 a)
 普曜經第四出家品第十二 (大正 3・五〇七 b) 等々
- ⑥ Rosenfield, *Dynastic Art of Kushan* G. 64 Huvishka and the Kushan Partion
- ⑦ 静谷正雄 インド仏教碑銘目録 No. 1730, 1762, 1775, 1778, 1781, 1788, 1803 等に外来人らしい人名が仏塔に奉納
- ⑧ ペシャワル博蔵カニシカ舍利器に「この寄進が全ての人々に至福をもたらさんことを」の銘文
- ⑨ 大正 51・八七四 a
- ⑩ 大正 51・八七二 c
- ⑪ 大正 51・五四四 a・b
- ⑫ 大正 21・二二八 b
- ⑬ 大正 50・七一四 a
- ⑭ Widengreen *Les Religions de L'Iran 1959* P245
 (田辺勝美氏 カニシカ一世金貨の国王立像考―焔肩の起源と意義― (仏芸一五六号 六〇頁))
- ⑮ 北進一 「毘沙門天像の変遷」 小学館世界美術全集 15 中央アジア 一九九九
- ⑯ 大正 16・四四〇 a・c
- ⑰ 大正 16・四三一 c
- ⑱ 大正 21・二二八 b

兜跋毘沙門天像成立に見られる西方文化の包容と大乘思想の具像化 (高橋)

があり、成立はそれ以前に遡る。全体の構成は「上総国興津広栄山妙覚寺代々目録之事」と題される前半部分（一丁表―七丁表）と、「日保門流本末建立目録覚記之事」（七丁表―一七丁裏）と題される後半部分に区分され、更に巻末（一八丁表）には延宝五年（一六七七）及び同八年（一六八〇）の災害記録が付されている。

「上総国興津広栄山妙覚寺代々目録之事」は、初祖日蓮から二八世日相にいたる妙覚寺の歴代譜、及び戦国末期の歴代住職に関する事歴について記される。妙覚寺の歴代は、通常前述したように二世日保・三世日家とされる。ここでは日家を歴代に数えず、四世日澄を三世としていることが注目される。明和二年（一七六五）成立の歴代譜では、日蓮・開祖日保・三祖日家とされているところから、江戸時代半ばまでの間に現在のように日家が三世に加えられたものであろう。

歴代住職の事歴については、里見氏に関する記事がある。里見義頼が弟梅王丸と家督を争った天正八年（一五八〇）の内乱、それに引き続く天正九年の正木憲時の乱において、義頼側が憲時側の拠点であった興津城を押さえる上で、住職日蔽は何らかの役割を果たしたようである。その功績により義頼から真言宗西光寺（現在のの上野妙福寺）、禅宗本西寺（現在のの中里長遠寺）など四ヶ寺と鹿島明神社を貰い受けて天正十年に改宗したと記す。この他にも、日保・日家に関する記事などがある。

「日保門流本末建立目録覚記之事」は、妙覚寺と各末寺の開創年代、及び妙覚寺の堂宇・仏像等の建立年代に関する記録である。前者については、正保二年（一六四五）を基点にして何年に当たるとの記述が過半を占めていることから、同年に成立した記録を元にしての考えられる。後者については、元禄二年（一六八九）までの記録である。建立に関わった職人についても記されており、在地における職人の動向を窺う史料としても貴重であらう。この

勝浦市妙覚寺所蔵「上総国興津村広栄山妙覚寺繼図写」(寺尾)

他にも、慶長九年(一六〇四)の地震、同十四年のメキシコ船の難破等について記す。

巻末に付された延宝五年(一六七七)及び同八年(一六八〇)の災害記録は、「日保門流本末建立目録^註覚記之事」の記事とは丁を改めて記される。末尾に「本書^註大聖寺有之」とあることから、妙覚寺末寺の大聖寺に所蔵される記録を「日保門流本末建立目録^註覚記之事」に追加して書写したものと考えられる。

なお、小湊誕生寺にも「上総国伊保荘之内上野郷興津村広栄山妙覚寺系図文書事」と題する系譜一巻が伝えられている。同書は戦国時代末までの系譜を記したもので、併せ見るべきものといえる。同書については、機会を改めて紹介することにした。

注

(1)「延享二年 身延久遠寺触下本末帳」(日蓮教学研究所紀要三三号)。

(2)「勝浦市仏像調査報告書」及び吉田辰郎「日義の墨書名をもつ日蓮坐像」(同上書)、像内納入文書については「千葉県の歴史 資料編 中世3(県内文書2)」及び「勝浦市史 資料編中世」。なお、拙稿「勝浦妙覚寺の日蓮聖人像」(「房総及房総人」七一巻八号)、同「日蓮宗の展開」(夷隅町史編さん委員会編「夷隅町史 通史編」)を参照。

(3) 妙覚寺所蔵文書。

(4) 滝川恒昭「葛力崎城跡の歴史的環境―正木憲時の乱と葛力崎城―」(葛力崎城跡調査報告書)及び同「正木憲時の乱と夷隅地方」(夷隅町史 通史編)を参照。

凡例

本史料は千葉県勝浦市興津の妙覚寺に所蔵される。横帳一冊で墨付一八丁、寸法は縦二二・〇センチ×横三三・二

センチである。翻刻にあたっては、次のようにした。

*各葉毎の終わりを」によって、各丁毎の終わりを」によって示した。

*字体は原則として常用漢字、それ以外は正字を用いたが、一部については異体字を用いたものもある。合字などは通常の仮名表記とした。

*返り点・送り仮名・振り仮名は底本の通りに示した。

*文字が虫食い等で判読できない場合、□で表した。

*本文には読点・並列点をつけた。

*編者の注記は（ ）で括った。

なお、本史料の翻刻紹介に当たっては、妙覚寺貫首堀水教進上人のご許可と御高配を頂いた。記して感謝申し上げます。

(表紙)

宝曆十一 辛巳年八月日 廿世 貞正院日相書ス

上総国興津村広栄山妙覚寺繼図写

妙要山聖福寺□

(表紙見返)

此書物 御朱印地出入之砌、牧野越中守様及披見、終得
理運、永可為寺門重宝者也、

元文三年戊午七月日

日輪在判

右者一妙院日秀書写所持、当寺納大切書故、此度写取、
右之一冊者本院江納置、惣当山諸法式二冊写、善栄寺・
聖福寺控、本書不残宝蔵納者也、

時費主

聖福寺

四十一代

廿世貞正院

日蓮尊師

日相(花押)

一、上総国興津広栄山妙覚寺代々目録之事

一、第一元祖四十三才御開眼
文永元年甲子十月十五日、

一、第二祖補法眼日保聖人

七才ヨリ七十七年御住、八十三御入寂、曆応三庚辰四月十二日、

一、第三弁律師日澄聖人

四十一ヨリ十八年御住、五十八御入寂、延文二丁酉十二月十一日、

一、第四權律師日惠聖人

廿五才、御住七日御入寂、延文二丁酉十二月十八日、

一、第五権小僧都日賢聖人

四十二ヨリ廿八年御住、六十九御入寂、至徳元年甲子八月三日、

一、第六三位律師日仙聖人

十六ヨリ御住八年、廿三嗚死玉フ、明德二年辛未三月廿三日、

一、第七助律師日内聖人

四十九ヨリ廿八年御住、七十七御入寂、応永廿五戊戌五月廿六日、

一、第八侍徒律師日実聖人

四十九ヨリ廿五年御住、七十五御入寂、嘉吉三癸亥三月廿六日、

一、第九御律師日伝聖人

卅一ヨリ十七年御住、四十七御入寂、長祿三己卯七月

廿一日、

一、第十大補律師日真聖人

卅六ヨリ廿五年御住、六十御入寂、文明十四壬寅十一

月五日、

一、第十一大補阿闍梨日滿聖人

廿四才入寂、付弟計無住、明応元年壬子十二月十八日、

上総助御一類也、

一、第十二権大僧都日能聖人

四十六ヨリ十九年御住、六十四入寂、文龜元年辛酉三

月廿三日、

一、第十三能登律師日義聖人

五十六ヨリ廿一年住、七十六入寂、永正十八年辛巳六

月十一日、

一、第十四弁律師日鏡聖人

五十六ヨリ十一年住、六十六入寂、享祿四辛卯五月十

四日、

一、第十五日養聖人、十三ヨリ四十三年住、五十五入寂、

元龜四年癸酉十月十七日、

一、第十六日嚴聖人、廿九ヨリ卅一年住、五十九入寂、

慶長八癸卯年八月十四日、大學僧云國主相談入、

一、第十七日慈聖人、卅七ヨリ四年住、四十入寂、慶長

十二丁未年十月十八日、

一、第十八日遵聖人、卅九ヨリ廿三年住、六十二入寂、

寛永七庚午年十二月十九日、

一、第十九日運聖人、位牌付弟無住、五十二入寂、寛永

五戊辰年八月八日、

一、第廿日證聖人、六十三ヨリ廿一年住、八十二入寂、

慶安三庚寅年六月廿二日、

一、第廿一日要聖人、位牌付弟無住、七十六入寂、寛文

二壬寅年十月四日、

一、第廿二日過聖人、四十五ヨリ五十四、寛文三癸卯十

一月隠居、下総アゴ山六十五入寂、延宝二甲寅九月十

五日、

一、第廿三日堯聖人、四十四ヨリ四十六、天和三甲子三

月十日入寂、寛文五乙巳十二月三日讚州九龜遠嶋、京

極百助殿預り、

一、第廿四日隨聖人、寛文六丙午入院、同戊申三月十五

日隠居、

一、第廿五日幽聖人、六十ヨリ三年住、六十二入寂、
寛文十庚戌九月廿〇日、高麗人子、熊本生、清正公鈴
持來ル、

一、第廿六日元聖人、五十二ヨリ二年住、五十三入寂、
谷中、寛文十一辛亥十一月十一日、

一、第廿九日達聖人、寛文十二壬子三月廿七日入院、御
年四十一才、延宝三乙卯四月廿七日日杯月杯御勤百座
被成、八月十日「開眼、大鏡甲子四月五日鑄申也、同
十二月九日江戸入寂、

一、第廿七日怡聖人、位牌付弟、金子六十兩本院什物納、
延宝三乙卯十一月十五日、六十才入寂、当寺家聖福寺
隠居、本妙院卜号、

一、第廿八日相聖人、日達師匠、藻原・興津出入訴訟被
成候故、先師連申候、延宝五〇八月晦日、証文本院
有之、

一、房州屋形大勢院義瀬勝巖、天正十五丁亥十月廿六日
御逝去、興津五ヶ処他宗地進上候、
本、西光寺 本、本西寺 本、浄聖寺
今、妙福寺 今、長遠寺 今、大聖寺

禪興寺 鹿嶋 此五ヶ処也、鹿嶋大明神日嚴聖人ノ御

代受法、本禪宗「称宜久我治良兵衛云人也、禪興寺興
津地頭岡本大覚介菩提所ナルニ依種々所望故、進上候、

房州・大田喜弓矢時、興津城、則日嚴師御拵故、房
州渡申候、其御札右五ヶ処、妙覺寺進上候、天正八年
庚辰七月ヨリ乱初、壬午二月相濟候、天正十壬午七月

亡、各々寺号改玉フ、未四ヶ処明白也、禪興寺古ヨリ
禪宗也、

一、後代瀧潜院義泰、房州一國ノ諸寺諸神御知行進上候、
清澄山法王寺ヲ御立候、慶長八癸卯十一月十六日、

一、館山、慶長十九甲寅九月落城仕候、忠義御代也、
□方莫居士御逝去玉フ也、

一、長遠寺日忍仏性院、長泉寺日栄本行院、生処代宿同
イトコドシ也、

一、日忍三人弟子、第一仏性院日性長遠寺二代、第二蓮
華院日出大聖寺十三代、第三円乘院日眷長遠寺三代、
仏性院日性後妙久寺取立申候、

一、日出弟子四人、一久行坊日誠、二実成坊日繼、三
蓮坊日礼、四久成坊日暹、

一、長泉寺日栄、後鏡忍寺聖人成玉フ、日栄弟子三人、

一日寿法音院、二日談威音院葉王寺、大坂_ニ死、三日在善養坊、

一、日寿弟子二人、一日泉覺長、二受忍坊日達長昌寺也、此、二人興津生人也、

一、日荣御父志鎌兄六良右門淨要、日忍御父同弟源左門道春、此、二人本長南人、則代宿移、二人御子御座候、淨要七月十八日、道春正月十二日、五十ヨリ太道心者也、妙覺寺大檀那、日養師御代也、

一、大聖寺代、開山日保、日明、日宗、日卿、日正、日統、日能聖人、日順、日悅、日富、日泰、日忍、日出、

一、善榮寺代、日義_{聖人}○開山、日用、日乘、日繼、日散、日現、日盛、日妙、日達、

一、長泉寺代、開山日真_{聖人}、日了、日富、日榮聖人、日寿、日泉、

一、寛永四年丁卯_{ヒトトヨリ}不受問答_ノ、二三ヶ年_ハ内々_{ニテ}身延・池上六ヶ敷事御座候、戊辰_ノ頃、江戸御公儀上、庚午五月六日御上意遠嶋相定、則六人_ハ聖人方々_々御出寺被成候、次第不同

日樹聖人、池上、長遠院

日賢聖人、中山法華寺

日領聖人、小西能化、守賢院
日充聖人、中村能化、遠寿院
日延聖人、小湊誕生寺

日進聖人、碑文谷

一、大高様関東御入部、天正十八_{カヘ}庚寅七月云云、「此ヨリ日本國中一味平均罷成候、以大高様御恩、一天万民上下一同日夜安樂世ヲクラシ、六十余州自用往行売買成、四姓甲乙人等遍、彼君奉_レ拜二世成就子孫繁昌可_レ祈者也、仍如件、

一、右大高様関東入被成、正月一日御カンラスエ申候所、箸一本御座候、則御意箸ガタラヌト被仰候、則御相伴者申様、一段目出度事御座候、則当年中関東入可被成候御念願、此ヨリ関東マテ片箸キリニ御手付可被成候祝申候、一入_{ニテ}御喜_ヒ御服二重・銀子十枚御引出申候、如其安其年内坂東御_{手カニ}付申候、昔_{ヨリ}タカトユメ、合セガラト申伝候、

一、日保聖人御弟子五人御座候、第一弁律師日澄妙覺寺二代、第二侍徒僧都日明大聖寺二代、第三權律師日惠妙覺寺三代、第四大補阿闍梨日承古湊四代、第五刑部阿闍梨日淨古湊三代、右寺持次第、是_レ発心次第、第一日

明、第二日澄御座候、

一、小湊誕生寺建立、自興津日保・日家兩人有御同心聚砂為「仏塔」志願以砂筑塚号「誕生寺」、從「當処」結草庵「日家奉移置」玉フ、日家御入寂已後御付弟無之間、日保御抱有之、其後為御代官「刑部阿闍梨日靜居置御座」、彼人本天台宗也、初漢原妙光寺皈伏、中頃退転有之、其已後日保ノ御弟子成候、日靜入寂後、大補阿闍梨日承居住坐、自「当山」家・日靜・日承三代古湊御相統有之、興津・古湊兩寺門人不可存「疎意」之旨、日承聖人御一筆有之、彼文云、
 一、汲「流」尋「源」香「々」討「」根「穿」雲「竹」林「自」寸「苗」生、浮「船」江「海」自「銚」露「起」矣、雪「山」大「土」身「投」半「偈」之「前」、香「城」薩「埵」命「捨」一「句」之「下」、法「主」聖「人」之「尋」生「処」、日「本」國「万」民「者」可「尋」安「州」小「湊」、日「家」・日「保」之「思」生「処」、兩「寺」門「人」者「可」思「興」津「給」田「妙」覺「寺」云云、仍為兩寺後代「註」之、其故如何、日家誕生興津御法跡之日保之末弟等也云云、
 貞治元年癸卯卯月十二日
 補法眼日保御直弟

日承判

一、日保門流本末建立目録覚記之事」

一、興津広栄山妙覚寺建立者、仁王八十九代龜山院元永元年甲子十月三日、祖師四十三御時、鎌倉御下御說法、十月十五日日保七才御時、小松原御難同年十一月十一日申酉時、正保二年乙酉三百八十六年妙覚寺當、元祖六十一御入滅妙覚寺建立十九年日御入滅也、日保七十七年御住、八十三御入寂、曆応三庚辰四月十二日、
 一、嚴長山釈本寺建立者、日嚴聖人御開眼、二代日受、元來祖師初轉法輪道場也、慶長七壬寅十月十三日御開眼、正保二乙酉四十四年當、慶長十三戊申年日受御堂立玉フ、町分同年九月也、今堂日性立、正保三丙戌七月十八日、
 一、常嚴山長遠寺・富永山妙福寺、嚴師御開眼、天正十年壬午七月七日正保二乙酉六十四年當、長遠寺二代日忍代慶長三戊戌七月十五日柱立、四間四方御堂立申候、日性代ナバキ、ウリ申候、堂本願田中越前法用也、
 正月廿八日命日、
 一、福聚山慈眼寺、嚴師御開眼、二代日雄慶長五年庚子三月廿八日建立也、右慶長四己亥八月西園「下」同十一月本田中書様御礼、寺田屋敷取一寺立玉フ也、庚

子正保二乙酉四十六年当、日春代元和三丁巳九月十二日柱立、四間四方、当立玉フ、

日受代恵日寺ウ、

日雄因幡国十七年住、其後下慈眼寺建立、小松原入寂、慶長十四己酉五月廿六日命日、寺田客殿寛永廿癸未五月六月日堂立玉フ、

一、法華山龍藏寺建立者、大永年中、日鏡聖人御代同村カチ道院立云云、日鏡御遷化正保二乙酉百十六年当、

一、上野山妙久寺、日養聖人御代、佐瀬一門元龜三年壬申妙久尼立也、正保二乙酉「七十四年当、

房州安布里

一、興光山蓮幸寺、本伊北妙詮寺末寺、石渡兵庫云檀那立、法蓮寺日学代妙覚寺移云、

房州三子

一、新継山妙蓮寺本藻原末寺、梅田甚三郎殿云且那立、法蓮寺日耀代妙覚寺移ナリ、

日天子別当

一、日耀山及徳寺建立者、日登聖人御開眼、寛永十四丁丑二月十六日、開山正立院日善、六間四間客殿立、造作満足佛像造立、卅四正保二乙酉九月六日死、

一、敬師文祿三甲午三月御上洛也、今慈眼寺御立被成候

御両尊、慈眼院日雄京都造立玉フ、四菩薩本善院日盛同時造立玉フ、敬師同四年乙未七月仏御伴下、同年十月十一日開眼也、其時敬師御伴泉本行院日榮、小者、与七郎云沙弥、寺久者也、両尊四菩薩日過御代慈眼寺移、

一、文祿四年乙未七月十五日、当関白様高野主徒五人御腹切玉フ也、

一、妙覚寺客殿○古来祖師御影、日義御代禪海寺御移時炎焼玉フ、其後日義鎌倉御造立、日保御形日能御代御造立、大黒日鏡御代御造立、大聖人御開眼永正十二乙亥四月八日也、

一、天目授与曼荼羅者「日真聖人御求云云、

一、妙覚寺三ヶ御重宝者、立像釈迦、板本尊、御筆御聖教、於門中朝夕三ヶ御祈祷仕候、釈尊、遵師御代炎焼、今天目授与足御折念候、真俗安楽祈也、

一、敬師御代、天正十五丁亥六御堂立玉フ、大破故日慈破玉フ、其後慈師慶長九甲辰十月一日池上ヨリ御移、同十一日丙午六月ヨリ四五堂慶長十二丁末立、同未十月十八日御年四十御入寂、四年住玉フ、

一、日遵御代、元和元年乙卯正月ヨリ大工使、同五月出

来申候、十間半」七間四方垂木組物破風造作満足、大工備州住治郎左門、則同四年戊午二月六日夜半炎焼仕候、其後材木求玉フ所、発病御入寂、六十二才、寛永七庚午十二月十九日、其後於御前辛未七月御圖望申候得者、則日燈聖人下申候間、同十月五日六十三才燈師居申候、今多造當日燈師被成候、

一、日燈御造營之事、寛永八辛未初十月五日御移、後十月客殿企、同十一月廿八日新初、十間六間半四方七ガイ、十二月十日柱立、申三月十六・七日葺、一度造作満足、大工新戸、佐右門宗久、

一、庫裏、同申四月十二日企、九間五間、同十一月十五日出来申候、大工備州住人治郎左門道円、竹屋流也、
一、書院、癸酉正月企、五間半四間半、造作満足五月十五日出来申候、大工庫裏同人、

(この間脱文あるか)

一ヨリハ五間三間同時立申候、造作満足大工大田喜住仁兵衛、

「同年七月七日、名主日置又左門殿受法、本天台宗也、
一、御堂、寛永十癸酉五月三日企、同六月廿日山入初、
甲戌七月七日新立、同十一月十五日柱立、亥二月廿八

日虹梁上ル、同三月廿八日棟上、四月廿八日葺申候、造作一度満足仕候、丙子正月ヨリ仏檀・空殿・金柱出来申候、空殿大工杉、谷部右門名字野呂、仏檀大工大田喜住仁兵衛、柱ノウルシハ大田喜住十左門、金ハクハ新田野権左門、空殿仏旦ホリ物彩色同人ナリ、

一、御入仏、寛永十三丙子十月十一日、十種供養妙詮寺御取持、迨「夜談義法蓮寺・長遠寺・サゴメン・宝樹院也、日出会式入仏夜朝聖役相マカナイ仕候、正日妙詮寺談儀御座候、古湊大乘院日喜御使僧御越被成候、日廷聖人遠嶋無主也、

一、妙覚寺鐘、寛永十九壬午五月八日、江戸ヨリ金八兩二分日燈御買被成候、施主切付如、

一、妙覚寺二王門、同年六月十九日柱立、七月十六・七月日葺申候、大工三月ヨリ居申候、大工塚、衆松屋市左門、惣門同時立申候、此、時分天下一同飢渴、金二分米一斗八升売買、錢一分一貫三百文売買也、

一、古湊宝塔同時立申候、同五月ヨリ大工四十人居申候、同九月出来申候、正保元年甲申四月八日塔供養被成候、古湊十八代日蓮聖人ノ御代ナリ、

一、妙覚寺二王造立、寛永廿年癸未二月清澄御詔、同九

月出来申候、十月三日天津ヨリ船取、甲申三月ヨリ彩色、万部掛錢諸人造立仕候、ウルシヌリハ大田喜左門、蒔絵、行川在長・周賢兄弟仕候、正保元年甲申八月廿六日開眼、時正中日也、燈師七十六才時分ナリ、一、町通道橋燈師御代当申候、御代官南条惣右門殿、諸旦那一味〇カセキ申候、寛永十三丙子十月十五日行初也、

一、清澄山法王寺建立、文祿五丙申七月廿四日、以国主并清澄寺別当西門院御朱印・法王寺立所、山深不此義用、然間得国主御意、正木岩見守為首百余人山責上、此時山名主行方イナバト云入道、同嫡子左近二人死、奇方岩見家中椎名仁右門・大村三弥二人已上四人討死、其時山ノ代官山下新藏云人法華宗、調無二公儀、終法王寺立、房州義泰御代也、則堺経王寺ヨリ仏像作、久成院日雄御供丁酉五月一日御下、六日開眼談義被成候、其後紀國藤城住惠雲院日弘相統也、元和八年壬戌二月晦日死去、其ヨリ退破仕候、正保三丙戌廿五年、

一、慶長九甲辰十二月十六日戌時大地震、則時津波入、諸浜人馬錫狗至海上引出、船魚家皆山谷打上、前代未

聞故、如レ此為後代物語記者也、

一、慶長十四己酉九月三日大風雨若和田尻リ云所、南波黒船打上、男女百余人乗、キヌワタイト・天目茶碗・サ鉢、種々宝物皆々分取、関東中三年間売買仕候、本田出雲守御知行時分、此時ヨリ金銀都錢世間初使申候、煙草此時分渡申候、本永樂錢使申候、寛永十六己卯九月ヨリ寛永錢世間使申候、

一、同年正月ヨリ神送云バケ物、世間皆金銭入造作致、不弁仕候、房州上総ニケ國者一入造作致、送時分五百人斗道具サマハバカ尽不弁申候、後々東下総送川捨入跡方無世間笑草ナリ、名利千金是等事也、

一、妙覺寺釈迦堂、正保二乙酉九月十九日新立、大工十一人・木挽二人居申候、同十一月十九日柱立、十二月十四日虹梁上、同十六日棟上、大工堺衆松屋市左門、正保三丙戌四月六日・七日・八日葺出来仕候、人足不

自用故、三日葺申候、燈師七十七才時御造立也、

一、妙覺寺番神、正保三丙戌八月廿日甲午新立、十一月廿日壬戌御遷宮也、大工サヌキ賀右門上四人仕候、大方作申ミヤ御座候、十五両斗出来申候、日燈師御代ナリ、

一、聖福寺、大聖寺八代目日順開眼、大聖寺興津立候時分、衆坊六坊承候、妙要山聖福寺殿師御代授玉フ也、
尊重院日善代也、

一老 一、聖福寺代々、日〇、日守、日善、日得、日怡、日寛、
日長

二老

一、本性院代々、日出、日誠、日教

三老

一、一妙院代々、日覚、日替、日秀

四老

一、正法院代々、日珠、日習

五老

一、常照坊代々、日生、日受、日来、日観

六坊

一、常住院代々、日富、日用

一、大坂落、慶長廿乙卯五月五日ヨリ七日迄合戦、七日申時分落城也、秀瀬様行方不知落玉フ、此時本田出雲守討死、大田喜城主五万石知行也、雲州様御送礼、延申候間、御恨大田喜町カネノリ云カジノ内方煩申候時分、御立一首誦失玉フ、

○野辺ニ出テ問ハサル方ノ色見レハアヲハノ中ノウス

モミシカナ

同年十月御送札御座候、

一、妙覚寺日過御代、客殿・庫裏・書院、明曆四年己亥正月ヨリ企、大工廿三人居、庚子二月満作申候、大工

新戸佐右門、

一、千仏明曆五庚子八月、仏師四人作ル、仏師仏種院已上四人、大乘釈迦伊丹藏人殿御内方ヨリ金卅五両御作

候、小仏安房・上総・下総三ヶ国ノ諸旦那施主七十両出来申候、内五十鉢京都より」下候、日過御代納所

候、千仏勸衆善榮寺住周陽院日達・徹照日観・日置諸

左門宗普三人也、

一、涅槃像、金卅五両是日過御代出来申候、

一、礼盤・天蓋・三ツ具足・蓮華七本・過去帳台、共日過御代出来申候、

一、礼盤・天蓋・打敷四枚伊丹藏人殿御内方施主也、

一、金灯笼三、日置諸左門殿施主也、

一、客殿阿尊様、日置諸左門殿息女智性院妙耀為菩提也、

一、四菩薩・四天王、日過御代出来申候、

一、保師御影、日過御代出来申候、

一、常香盤日過御代出来申候、

- 一、千仏御開眼、寛文二壬寅年三月廿三日・廿四日・廿五日、以上三日御法談、日蓮聖人御開眼ナリ、
- 一、鐘樓堂・裏門、日堯御代建立被成候、
書替
- 一、妙覺寺廿五石御朱印、慶長年中日燈聖人〇御頂戴被成候、

一、幡十本・華曼二ツ、是伊丹藏人殿御内方見塔院日宝寄進也、日蓮御代出来申候、

一、御酒ス、一对箱入、是日蓮御代出来申候、

一、狐不入蔵、日蓮御代出来、

一、御代々御岩屋、寛文五己巳七月日堯御遠嶋之時分出来申候、以前東山高岩御座候、

一、〇鐘日達聖人御代、貞享元年甲子四月廿三日鑄立申候、
今

一、日宗御造営祖師堂、二王門葺替、元禄二己巳閏正月朔日ヨリ七日マテ被成候、

一、日宗御造営祖師堂、二王門葺替、元禄二己巳閏正月朔日ヨリ七日マテ被成候、

朔日ヨリ七日マテ被成候、

(余白)

延宝五丁巳年九月三日丁丑日巳刻ヨリ四日戊寅日未申刻迄、大洪水シテ山クツレ田畑多損、川辺者大情流死、同九月廿日頃ヨリ日夜五七度宛ニ地震、乍レ去大分非ニ地震、中小分也、同十月九日入専、二日目ニテ癸丑日ナリ、

或諸浜津波入人大情死、其夜天無雲一点、風木葉不レ動、海波不レ立、其後十四・五日ノ間地震、又廿二日・三日大雨降、又廿五日晝夜十四・五度地震、其ノ後五日一度、三日一度ツ、午、正月中比マテ地震ス、

一、守屋坂ヨリ神田谷向「蟬立洪水可レ知、

一、延宝八年庚申八月廿五日大風吹、同閏八月五日洪水、七十有余人民是不レ覺申也、同六日大風吹、江戸中へ

大分水入人大情死、五十余者共誰終不レ覺申也、同十四日大風吹、大木共大分折家共破損、百内五程無何

事、前代未聞大風申伝也、未・申・酉三年飢渴人民

大情死、其後米穀下直成万民喜申事千歳万歳祝也、

本書大聖寺有之、

書写主

貞正院日相(花押)